

## 池田林儀とロシア①

野口 久美子

96年前、一人の日本人男性がモスクワに降り立った。秋田県出身のジャーナリスト・池田林儀（しげのり）。戦前、ドイツや占領下朝鮮半島のジャーナリズムに邁進し、占領下の京城（現在のソウル）では伊藤博文の創業した新聞社「京城日報」で副社長を務めた。また、瀬戸内寂聴氏が瀬戸内晴美時代に発表した「ここ過ぎて 白秋と3人の妻」（新潮社1984年）では、北原白秋の2番目の妻章子と駆け落ちする新聞記者が登場するが、それはベルリン特派員になる直前の池田である。私の大叔父であり、私がロシアの世界に足を踏み入れた理由のひとつとなった人物。

「ロシアは、人をして、限りなき空想をそゝらしめる國である。その空想が、夢となり、まぼろしとなり、紫の煙となりて、人をして自由へのあこがれをおぼえしめる。その夢の國、自由の國の都モスクワヴァへと、今自分はいそぎつゝある。」

「永遠の貧乏」（文友社1926年）に収められた「白樺の色紙」で池田は、1925年2月、モスクワへ向かうシベリア鉄道での思いをこのように綴った。報知新聞では大隈重信侯の番記者となり大隈邸に住み込み、1920年から5年間ベルリン支局に勤務した池田は、既に立派なナチスドイツの信奉者でもあった。

1925年は日露間の重要な年である。1月20日に日ソ基本条約が締結され、2月25日に批准された。日本側は駐中華民



国特命全権公使芳澤謙吉、ソ連側は駐中華民國大使レフ・カラハンが署名した。芳澤公使は、署名の数日前、昼食の後のスケートで大腿骨を骨折したので、病床でこの記念すべき条約に調印した。調印後、多くの感謝と祝福の電報が届き、骨折を知らぬ人々から「オホネオリヲカンシャイタシマス」の電報に、芳澤の妻は池田にそのレントゲン写真を見せながら、複雑な気持であったことを述懐する。

池田が東京を出発したのは2月12日、下関、奉天、満州里からシベリア鉄道でチタに入り、2月21日の昼に雲の降りしきるモスクワに到着する。彼がシベリアを通過したのは1924年7月が最初で、当時は古ぼけた列車に粗末な車内食、人々の疲弊ぶりにうんざりしていた。たった8か月で列車の様子は激変し、人々の様子も食事も変わり、整理整頓され気持ちよく鉄道旅行が可能になったことに驚くのであった。それは、モスクワに到着しても繰り返される驚きで、数か月の間に大きく変貌を遂げる当時のソ連の姿は、現代のロシアにおいても受け継がれている。変化が訪れる時は瞬く間にその波に身を委ねられる国こそ、ロシアである。時代を反映し、あれほどドイツに傾倒した池田だったが、この本の中ではロシアにシンプルで深い政治経済的視点に基づいた関心を寄せている。

奇しくも私も大隈侯の早稲田大学を卒業し、ドイツに暮らしたのち、日口関係に資する企業を経営している。身近な先人の足跡に、現在の日露関係の在り方に思いを馳せざるを得ない。（理事）